

論文

明倫短期大学歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻の果たした役割

大平芳則, 阿志賀大和

明倫短期大学 歯科衛生士学科専攻科 保健言語聴覚学専攻

新潟リハビリテーション大学 医療学部 言語聴覚学専攻

What Did Department of Communication Science Do ?

Yoshinori Ohdaira, Hirokazu Ashiga

Department of Communication Science, Meirin College

Speech-Language-Hearing Therapy Course, Department of Rehabilitation, Niigata University of Rehabilitation

明倫短期大学歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻は、歯科衛生士学科の卒業生を主な対象としてダブルライセンスの取得を目的に発足した。発足から閉鎖までの16年間で69人の修了生を輩出し、そのうち現在までに58人が国家試験に合格し全国各地で活躍している。臨床実習を行なう場としてことばクリニックを開設し多くの学生の実習指導を行なうとともに、ことばに問題や悩みを抱える多くの子どもとその保護者に対して、訓練、指導、助言を行なった。社会に対するこれらの貢献は、明倫短期大学の活動の一部として、歴史に刻まれるであろう。

キーワード：言語聴覚士、歯科衛生士、養成、明倫短期大学

Keywords: Speech-Language-Hearing Therapist, Dental Hygienist, Training, Meirin College

1. はじめに

明倫短期大学歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻（ST 専攻）は、同短大歯科衛生士学科の卒業生を主たる対象として開設された2年制の言語聴覚士養成課程である。このST 専攻は平成27年3月をもって閉科となった。本稿では、ST 専攻が果たした役割について記録するとともに、その歴史を振り返りたい。

2. 歴史と特徴

ST 専攻は、本学歯科衛生士学科の卒業生が、歯科衛生士（DH）と言語聴覚士（ST）のダブルライセンスを取得し、より多様な知識と技能を身につけて社会で大きな貢献を果たすことを主な目的に、DH 学科の専攻科として平成11年4月に開設された。1学年の定員は10人、総定員数は20人であった。

言語聴覚士の養成課程は多様であるが、ST 専攻は言語聴覚士法¹⁾ 33条3項に規定されている、2年間でST の国家試験受験資格を得られる養成課程

であった。国家試験受験資格が2年間で得られる一方、ST 専攻の受験資格として入学以前に一定の科目を修めていることが必要であり、その受験資格の有無は入学試験前の受験資格審査によって判定された。同法33条5項に規定されている4年制大学の卒業生を対象としてST 養成を行なう2年制課程とは異なり、4年制大学を卒業している必要はない。しかし、厚生労働大臣の指定する科目のうち一定以上の科目を履修している必要があるため、ST 専攻の受験資格を持つ者は比較的限られ、受験の意思があるにもかかわらず受験資格審査で「受験資格なし」と判定されることもしばしばあった。もちろん、明倫短期大学 DH 学科においては、そのようなことが生ずることなく確実にST 専攻の受験資格が得られるよう、カリキュラムに配慮がなされていたのはいうまでもない。

以上のとおり、ST 専攻の入学試験受験には一定の科目を履修していることが必要なのであって、DH 学科を卒業していることは受験資格の必須事項ではない。したがって、明倫短期大学 DH 学科卒業

生ではない学生も多く在籍していた。他学の DH 学科卒業生、教育学、看護学、心理学、言語学、経済学、文学などを学んだ者など、多種多様な分野から ST 専攻に入学したのであった。受験資格審査で「受験資格なし」と判定された場合は、どんな科目を履修すれば受験資格を得られるかを明示していたが、それに基づいて放送大学などで必要な科目を履修したのち受験資格を得て、そして入学を果たした学生も少なくなかった。このように、ST 専攻に在籍する学生のバックグラウンドが多様であったこともひとつの特徴である。

カリキュラムは、厚生労働省によって履修すべき内容が定められており、2 年間でその全てを終了しなくてはならない。ST 専攻の場合、入学以前にすでに一般教養科目は履修済みであるため、カリキュラムは選択科目を除き全て専門的な科目となっている。開設当初から数回のカリキュラム変更がなされたが、最終改訂版である平成 25 年度のカリキュラムでは、専門基礎科目が 660 時間 44 単位、専門科目が 1170 時間 44 単位となっている。専門基礎科目は 15 時間を 1 単位とし、専門科目は講義のみならず演習も多く含むため 15 時間または 30 時間を 1 単位、60 時間を 2 単位としている。ただし、専門科目のうち臨床実習は 1 週間を 40 時間とし合計 480 時間 12 単位としている。専門基礎科目と専門科目はすべて必修科目である。

ST 専攻入学前に履修した科目のうち、履修すべき科目と同等以上の内容を履修している科目につい

ては、学生本人の申請と教授会の認定により、最大 30 単位までは履修が免除された。学生はその分、他の科目に集中して勉学に励むことができた。

このカリキュラムでは科目を細かく分け、1 科目あたりの内容をしほり時間数を少なくしていることが特徴である。短期間のうちに科目を終了させ、狭い出題範囲で試験を実施することにより学生の負担軽減を図っている。

わが国では超高齢化社会を迎え、それに伴うさまざまな問題をかかえているが、そのひとつに摂食嚥下障害があげられる。脳血管障害その他の疾病や外傷により身体に障害を持つ人にとっては食事が大きな楽しみであるが、摂食嚥下障害を伴う場合は、それさえもかなわない。DH も ST も摂食嚥下障害にアプローチする専門職であり、両者の立場から支援できるダブルライセンス取得者は、この分野における貴重で重要な人材である。そのような養成を行ってきた ST 専攻は、時代のニーズにあった先駆的な養成課程であったといえよう。

3. 修了生の状況

ST 専攻では、平成 11 年 4 月の開設から平成 27 年 3 月の閉科までの 16 年間に、69 人の修了生を輩出した（男 11 人、女 58 人）。最初の修了生は平成 12 年度（平成 13 年 3 月）に誕生した。年度別の修了生数を男女別に図 1 に示す。平成 13 年度には修了生はいなかった。なお、9 月に終了した者が全部で 3 人いたが、これは、たとえば平成 13 年 9 月の

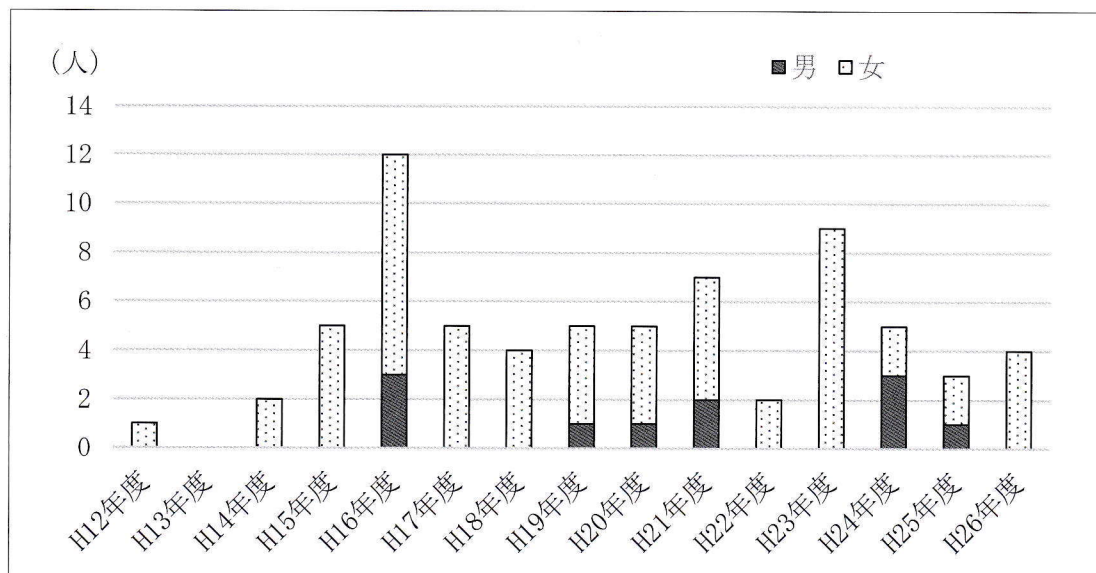


図1 年度別の修了生数

終了である場合には、平成13年度の修了生としてカウントした。

ST専攻を終了した69人のうち、本学DH学科の卒業生が18人、それ以外の者が51人で、本学DH学科の卒業生でない者のほうがずっと多い人数となっている。歯科衛生学を学んだ学生にとっては、言語聴覚療法学は残念ながら十分に興味をひく分野ではなかったようである。

4. 国家試験

言語聴覚士は医療資格であり、国家試験を受験し合格してはじめて資格を得ることができる。ST専攻修了生69人のうち、1回目の受験で国家試験に合格した者は47人、合格率は68.1%であった。

平成27年3月27日に第17回言語聴覚士国家試

験の合格発表があったが、この時点において、国家試験に1回で合格しなかった22人の2回目以降の受験状況を調査すると、受験者の延べ人数は31人、合格者数は11人であり、全修了生69人のうち58人が国家試験に合格し、11人が合格していないことになる。合格していない修了生に対する国家試験への支援は今後必要であろう。

5. ことばクリニック

医療資格がみなそうであるように、言語聴覚士もその養成課程において、臨床実習は特に重要な科目として位置づけられる。ST専攻では多くの場合、現住の居宅かまたは保護者のもとから臨床実習を受けることができる地理的条件の施設で臨床実習を行ってきた。遠方に見知らぬ土地でアパートなどを

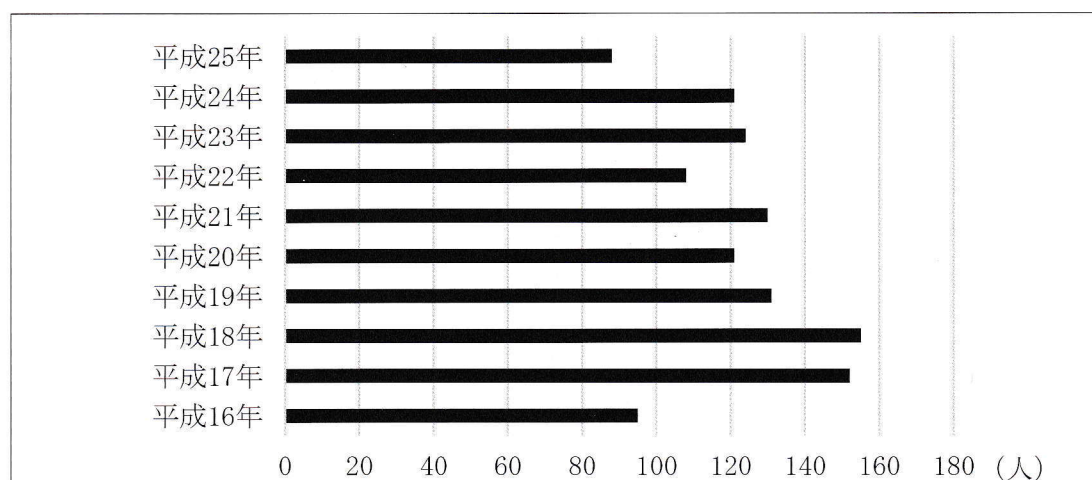


図2 ことばクリニックの初診患者数の推移

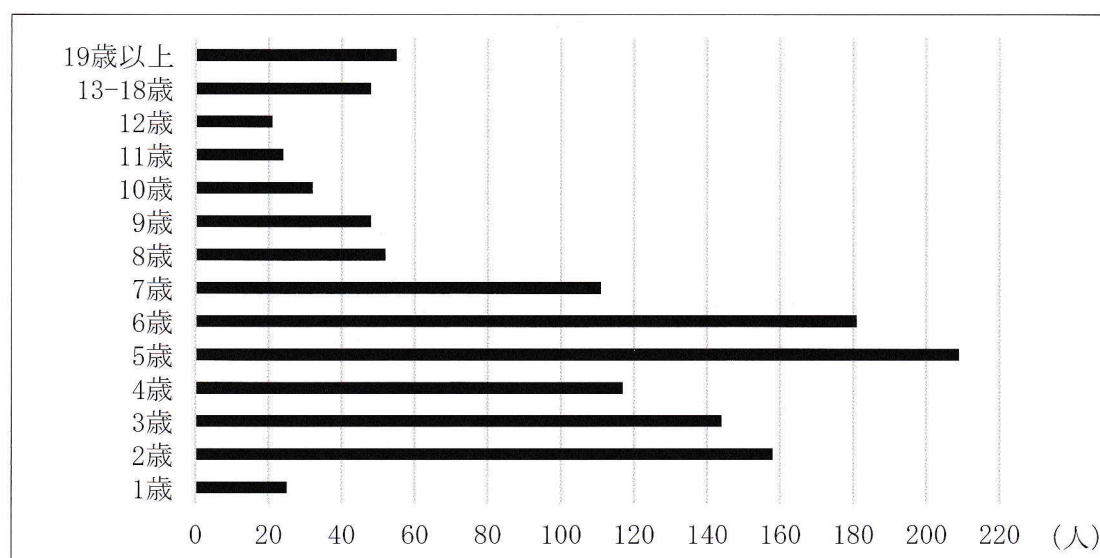


図3 ことばクリニックの年齢別患者数

借りて臨床実習を受けざるをえないことがしばしばある言語聴覚士教育において、ST 専攻の臨床実習は、学生の精神的、経済的、物理的な負担が多少なりとも軽減されていたといえるであろう。

そのような状況にあって、より教育的効果の高い、より負担の少ない実習施設を確保するために、学内で臨床実習の行なえる施設として設置されたのが、ことばクリニックである。専従の言語聴覚士を新たに迎え、医療保険機関として平成 16 年 10 月に開設された。臨床実習施設という役割を終え事実上閉鎖となった平成 25 年 12 月までの 9 年 3 か月間に、ST 専攻の学生 21 人に臨床実習指導を行なっただけでなく、臨床実習以外の科目における実習や見学のできる場として機能してきた。

ことばクリニックはまた、地域に貢献する医療の役割も担っていた。開設当初より多くの患者が訪れ、ことばに関する訓練、指導、助言を受けた。患者実数は総計 1225 人、1 か月あたりの新患者数は平均 11.0 人となった。ことばクリニックを初診した患者数の推移、年齢別患者数をそれぞれ図 2、図 3 に示す。

開設された平成 16 年は、診療期間が 3 か月と短いにもかかわらず、その間に 95 人もの新患者が訪れている。これは驚異的な数字といえよう。ことばク

リニックに赴任した言語聴覚士が以前勤務していた施設の患者が、雪崩を打つようにやってきた結果である。

また、ことばクリニックを訪れた患者の多くは小児であることが分かる。特に、ことばの問題が顕在化する 2 歳以降の人数が多く、小学校学齢期では年齢が高いほど少なくなる。小学校入学までにことばクリニックでことばの問題が解消することや、問題を持ち続けるケースでもことばの教室などでフォローされることがその要因であろう。

6. まとめ

ST 専攻は 16 年間にわたって 69 人の修了生を輩出し、これまでに 58 人の国家試験合格者をうんだ。その多くは全国各地で活躍しており、社会に貢献している。また、ことばクリニックは ST 専攻の実習施設として機能し、さらに地域医療の一端を担う施設として社会貢献をしてきた。このような貢献は、明倫短期大学の活動の一部として、歴史に刻まれることであろう。

文 献

- 1) 言語聴覚士法 平成 9 年 12 月 19 日法律第 132 号